# お父さんがこんなに小さくなった!!

山本弘子

空襲当夜、父は防空班長をしておりました。

「高知からB29の大編隊が来ているようやから、高松も危ないと思う。無駄になってもいいからお母さんと一緒に安全な所に行きなさい」「いやや明日学校に遅れるし、また空襲警報解除になったら、疲れるだけやもん」「とにかく今夜は危ない予感がするから、屋島の方に行った方がいい」と問答を繰返した後、母と妹、弟二人と乳母車で、着替え一枚持たず、散歩の気持ちで出掛けたのでした。

高松市と屋島の途中でザーッと言う音に振返ると、栗林公園の辺りが火の海でした。

夢中で走り出し近くの農業用水路に飛び込みました。

私達は防空頭巾と言って綿入りの帽子をかぶっておりましたが、私は何度も何度も水をかけるのですが、熱気の為にそれがすぐにカラカラになるのです。

朝まで水に浸っておりました。喉が乾くとその泥水を飲んで乾きを癒すのです。

その内、火の粉が水の中にどんどん落ちてくるのです。母達と一緒に隣りの奥さんも一緒に逃げて来たのですが、生後一年に満たない子どもを抱いて一緒に用水路に飛び込んだ隣りの奥さんは段々熱くなっていく水に、恐怖から母に「奥さんもう私達死ぬのやから、この子を殺します」とその子を水に押し込もうとしました。母は「何を言うてんの、出来るだけ生き延びる事を考えんと」と隣の子どもも母が抱き、当時三歳だった弟を私が抱き、片腕で皆んなの頭巾の上から水をかけ続けました。

ようやく空が白く見えかける頃、焼夷弾、爆弾の攻撃がやんだようで、私達は用水路から這い上がり、のろのろと歩き出しました。

周囲の家から焼ける火の粉と焦げた匂いの熱気の道を素足で、水と泥まみれの服で屋島まで歩いたのです。途中焼夷弾が牛の横腹に突っ立っているが、生きているのです。